

日本における寄付文化を進展させる方策

提言

寄付に託されたみんなの思いを、みんなで集め、みんなで活かす「みんなの基金」。共募も、地域の基金も、コミュニティ財団も、いろいろな形で活動を支える資金作りの仕組みを広げましょう。

登壇者

- 【進行役】 早瀬 昇氏 (社福) 大阪ボランティア協会理事長
【アドバイザー】 鵜尾 雅隆氏 (認定特非) 日本ファンドレイジング協会代表理事
見年代 瞳氏 (特非) やませデザイン会議事務局次長
矢野 正広氏 (認定特非) とちぎボランティアネットワーク理事長

■ 寄せられた声から

- 社協共募担当者として、本当に身になる内容でした。参加した分科会の中で一番充実していました。途中、「共募も地域を基盤としているがどうなっているんだろう…」と思っていたところで、早瀬先生が話題に出してくださり、とてもありがたかったです。市町村一担当なので微力ですが、協働していけるよう、私も視野を広げていきます。
- 「日本における寄付文化を進展させる方策」で、鵜尾雅隆氏の「幸福の4要素とは何か」の4要素が心に残る言葉でした。

議事要旨 早瀬 昇氏

本分科会では、地域で寄付者と活動者をつなぐ取り組みが焦点となった。

まず、早瀬昇（大阪ボランティア協会理事長）から、戦前は活発に寄付募集がなされたが、戦後、福祉分野では共同募金を除き制度的な財源保障が基本となった。しかし近年、市民が自主的に社会課題を解決する機運が高まり、その財源確保策として寄付への関心が高まっていることが確認された。

次に「とちぎボランティアネットワーク」の矢野正広理事長は、合同ファンドレイジングの事例を紹介。調査・企画段階から参画でき、多くの人々を巻き込むため他人寄付を一定額集めるとイベントに参加できる仕組みで、参加を楽しみつつ寄付集めが進む。2020年度までの12年間で3,446万円の助成を実現。子どもの貧困“解決”ではなく貧困“撃退”の表現で勢いを高め、しょく（職と食）、エネルギーに加え、助け合いの“自給”が大切だと地域活動の理念も語られた。

久慈市を中心に活動する「やませデザイン会議」の見年代理事務局次長は、市町村が圏域の北三陸じもっと基金の活動を紹介。「応援するのも、されるのも、地元です」のキャッチフレーズで、メインの共感寄付は6年間で657万円の寄付を得た。市民団体は地域に見守られ支えられる実感を得、寄付者も身近な地元で寄付できると喜ばれている。ただし、25%の手数料だけでは運営が困難で、無給スタッフ体制が悩んだ。

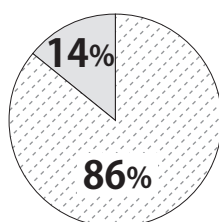
「日本ファンドレイジング協会」の鶴尾雅隆代表理事は、

栃木の活動が寄付で何が起こるかを事前に示し、地域の変化という成果が見える点を評価。北三陸の活動も、身近な地域の中でこそ資金循環が見えやすく、寄付の習慣化が起りやすいと評した。その上で、世界最速の少子高齢化で「自分たちが何かしなければ」という意識が広がる中、寄付には遠くにも支援できる射程距離の長さ、時間的制約がない広がり、つながり感の創造などの意味がある。また、誰かのためになれることで寄付者自身も幸せになり、“寄”り添い“付”き添うという“寄付”を、さらに広げたいとした。

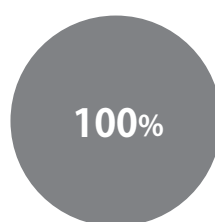
その後の意見交換では、①共同募金と新たな寄付の仕組みは競合せず、互いの成果で寄付全体への信頼を高められる仲間としての連携が必要、②寄付の募集・助成を仲介する仕組みは、寄付しない人への呼びかけも含めて社会に大きな広がりをもち、その仕組みの維持費として手数料への理解を上げねばならない、③「人は人に寄付をする」と言われるが、共同の寄付集めは「人は人と寄付をする」取り組みと言える、④弱味を見せる面もある寄付依頼は躊躇しがちだが、良い人が寄付するよりも寄付すると良い人になれるものであり、参加の機会を示して信じあえる社会を作りたい、⑤寄付は結構仕事をする。思いをもったお金を託されていると知って意欲が増し、交換に留まらない無限の循環を生み出し得る、⑥寄付という関係性を得ることで人々のものの見方が変わりうる、などが指摘され、地域で寄付推進の仕組みを創る意味が確認された。

アンケートの結果 参加者概数：52名 回答者数：14名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

